滋賀文化財だより
NO. 146
1990. 3. 5
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

172．高句麗の都平壌 高麗の都開城を訪ねて

—後編—

4．徳興里古墳と江西三墓

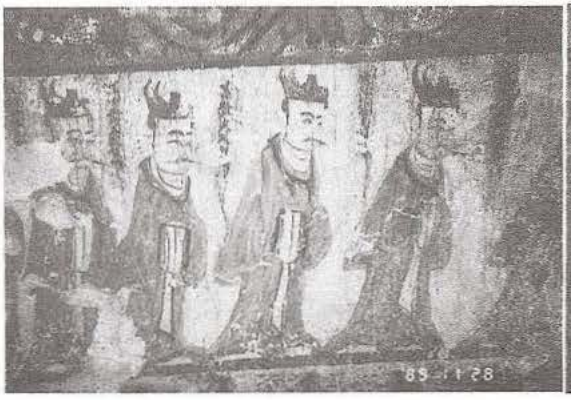
5世紀初頭の高句麗の代表的壁画古墳として知られるのが徳興里古墳、7世紀の四神図の壁画古墳として著名なのが江西三墓の大墓と中墓である。

冬期に入ったこの時期、通常は見学は不可能なようであるが、好天にめぐまれたこともあって特別に石室内に入って見学することが許された。

徳興里古墳は広大な平野の北寄りに小独立丘陵があり、その頂部に造営された古墳である。この丘陵のすぐ北側には標高346.5ｍの舞鶴山が屹立する。この古墳は1976年12月8日から翌年の1月20日までの間に発掘調査された封土墳である。石室は前室と玄室から成り、天井は穹窿状に上がりながら上方は段状持送りになっている。石室には全面に約200名を数える人物風俗画が描かれ、古墳の被葬者と築かれた年代等を示す墓誌銘があり、きわめて重要な古墳である。墓誌には、被葬者は鎮という名で、その出身地や経歴、葬礼の日などが記され、77歳で没し、永楽18年（408）12月25日にここに葬られたことがわかる。壁面には被葬者（主人公）の肖像や彼に伺候する郡太守の群像、狩猟図、牽牛と織女図、行列図、日・月・星辰図などがきわめてリアルに描かれている。

徳興里古墳

石室内部には見学のために電灯が各所に配されているが、この日はどこか故障のようで懐中電灯を頼りに真暗な通路を真直ぐに進んだり左右に折れたり、一段下がったり上がったりしてこわごわ進んで行くと、突然懐中電灯に照らし出された壁画が眼前に現われた。前室の壁画だ。目が次第に慣れてくると四壁から天井にかけてぎっしりと描き込まれた色あざやかな壁画が目に飛び込んできた。しかも、それが目と鼻の先にあるではないか。想像していたより小ぢんまりとした部屋で、著名な墓誌は目の高さにある。これは絵画を描いた後、銘を記す範囲に薄い褐色の塗料を施した上に墨筆で記している。前室奥壁の主人公鎮の姿はしゃがみ込んで見る高さだ。壁面に身体がふれないよう細心の注意を払いながら玄室に入ると、こちらはやや広くてゆったりとする。床面奥寄りには直方体の石が棺台として置かれている。奥壁左側には主人公鎮が描かれ



徳興里古墳前室の壁画（郡太守群像）

徳興里古墳前室の壁画（天の川と織女など）

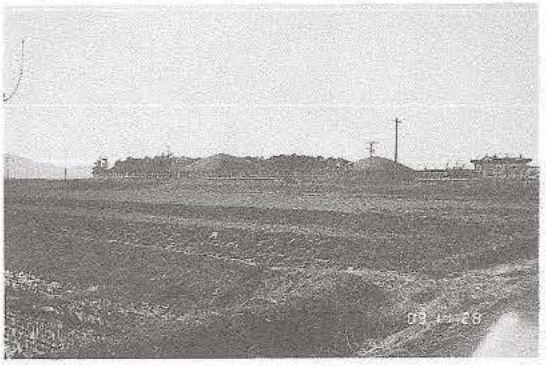
るが、右側は空白となっていて、それは描かれたものが剝落したものではなく、当初から描かれていないことを自らの目で確認した。

興奮さめやらぬ間にわれわれの乗ったベンツは江西三墓へと向かった。江西三墓は徳興里古墳の西方約1.8kmの平地にあって、徳興里古墳から遠望できる。水田中に3基がきれいに整備されて並び、いずれの石室も中に入れるようにしている。われわれは大墓と中墓の石室を見学できた。いずれも入口からいくつもの扉を経て玄室にいたるが、ここは徳興里古墳とは違って壁画保護のため玄室内に羨道から通じるよう厚さ1cm程の透明の合成樹脂の箱が設けられ、見学者はその箱内から玄室内部を観察するようになっている。玄室も大きく、したがって四神図も雄大に描かれ、迫力満点の壁画であった。

5．開城城（開京）と満月台

開城城は統一新羅ののち、後三国時代を経て当地方の豪族であった王建が興した高麗の都城である。開城に都が造られたのは919年である。その後、蒙古の圧迫により一時江華島に遷都されたが、まもなく還都され、1392年、高麗の滅亡まで続いた。

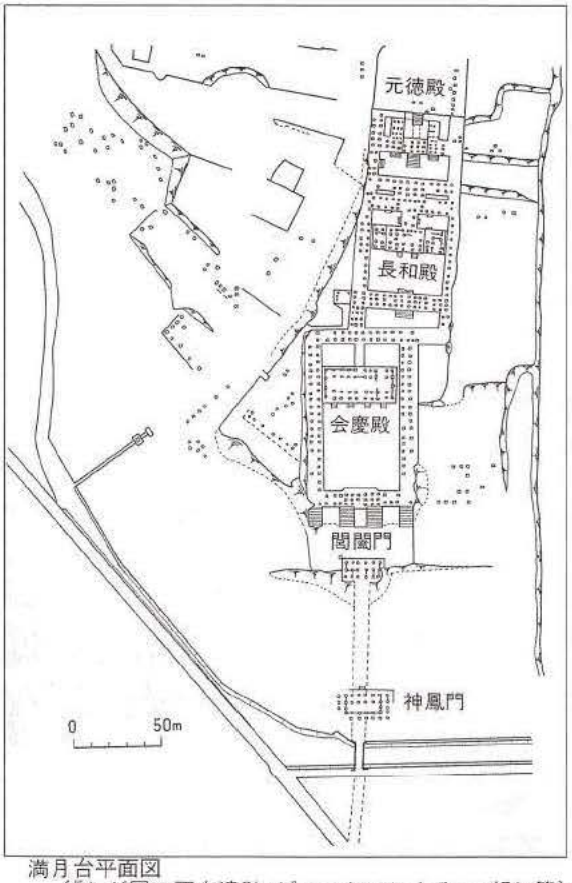
われわれは、平壌から夜行列車に乗り、翌朝早く開城に到着し、王宮のあった満月台を見学した。開城は平壌とは違ってまわりを山に囲まれた盆地である。平地はそう広くなく、碁盤目状の街区を設ける中国式の都城の造営には不向きな場所に感じられ、また、当初からそうした都造りは意識しなかったものだろう。都の周囲は平地を円形に取り囲むように山稜がめぐり、その尾根を結ぶように城壁を連ねて、谷部や峠部に門を設けている。標高485mの松岳山を最高峰として、特に北面は屏風のごとく高く屹立している。東西約6.2km、南北約6.0kmがその最大距離で、その北西部をさらに城壁で仕切って内城としている。内城の南端部に南大門が置かれる。この南大門の位置は全体のほぼ中心部に当る。内城はさらに何重かの城壁で守られ、その最も奥に王宮である満月台が造営されている。



江　西　三　墓

現地で地形をみてみると、この都は巨大な朝鮮式山城の感がする。高麗の都がなぜこのような山間部に置かれたのか疑問が生じた。この地域が始祖王王建の出身地域であったことにもよるだろうし、渤海や契丹、元など西方からの侵入に備えるためには平壌より東方が少しでも有利だったろうし、打ち続く戦乱から都を守り国政を執るためにはこうした天然の要害の地が必要だったのだろう、とそびえ立つ松岳山を仰ぎ見ながら想像してみた。

満月台の主要殿舎は松岳山の麓から南に派生する舌状台地いっぱいを使って建てられていた。最初に見学したのは平地にある神鳳門であるが、礎石が良く残った7間×4間の巨大な門である。その北側の一段高い地にある閤闔門（りょうもん）に立つと、北正面の高くて急傾斜をもつ4つの石段に圧倒される。10m程の高さはあろうか。息を切らして登ると、眼前に礎石列がずらりと並び、北に次第に高くなりながら建物の並ぶ様子が一目瞭然であった。石段を登ったすぐ北側、すなわち、舌状台地の南端にあるのが会慶殿で、四周を回廊で囲まれ、南側に広い前庭を伴う。9間×4間の巨大な建物で、この王宮の正殿である。この北にはいずれも回廊に囲



満月台平面図
（『わが国の歴史遺跡』ピョンヤンによる。一部加筆）

まれた長和殿、元徳殿が続く。

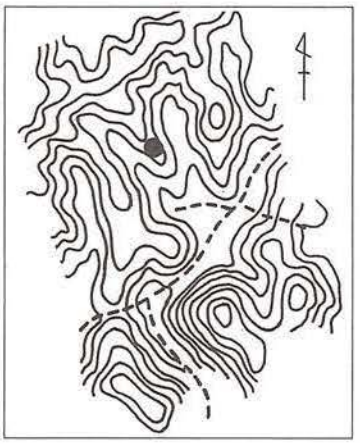
われわれの見学のためにわざわざ枯れ草を焼き払っていただいたようで、礎石列がよく見える。ほぼ完璧に残っているといっても過言ではない。例によって駆け足で見て回った後、満月台の東南約500ｍの地点で発掘調査をしているのが目に入ったため、お願いして見学させていただいた。1.5ｍ程掘り下げていたが石積み基壇が顔を出し、多くの高麗時代の瓦が出土していた。李先生の御説明によると、高麗時代に官史を監察する役所、御史台跡ではないかということであった。

6．恭愍王陵

高麗王朝の歴代王陵は都の周囲に散在するが、特に集中しているのは西方の義州街道の西側と松岳山の北側の谷に沿った地域である。現在、王ないし王族の陵墓は68基程が確認されていて、恭愍王陵はその１つである。

高麗王第31代恭愍王は高麗後期の王で、中期後半からは元軍の侵入および内政干渉により国力は疲弊しきっていた。恭愍王の頃は元の勢力も弱体化し、彼は元侵略軍を完全に駆逐して高麗王権を立て直し強化した。このためか、恭愍王陵は他に比類のないほど荘麗に造られ、遺存状態も良い。

恭愍王陵は開城の中心部から約7.5㎞西方の山中にある。主山を背にして小さく突き出た山丘の中腹に営まれるが、その左右からは別の丘陵がそれぞれ前方に張り出し、主谷川は陵の向かって左奥から陵の前方を通って右方に流れ出ている。風水思想に基づいた理想的な立地である。



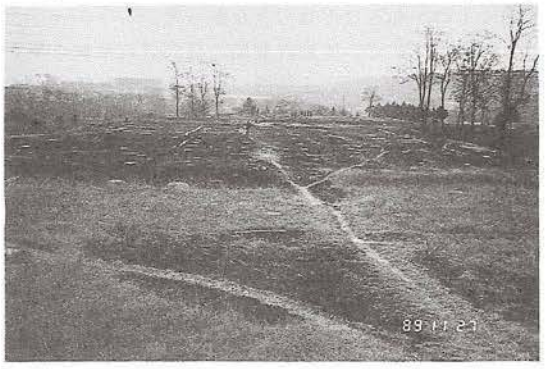
恭愍王陵の立地

ここは双陵となっており、向かって左が恭愍王陵である玄陵、右が王后陵である正陵である。説明によると、先に王后陵が営まれるが、王は墓地の選定に数年をついやし、ようやく見つけた所という。墓地は４段に削り出し、最も奥の広い部分に墳墓を築く。いずれも直径約14ｍ、高さ約6.6ｍの封土墳で、裾には花崗岩に半肉彫で美しく彫刻された護石を12角形にめぐらし、さらにその外側に欄干石をめぐらす。２段目の両脇には向き合う２対の文官の石人が、３段目には同じく２対の武官の石人が立つが、文官上位が示されている。この陵はきわめて良く整備され、開城における代表的史跡整備地といえるようだ。

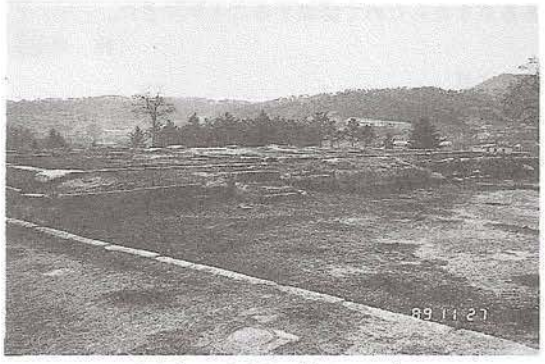
玄陵の内部は発掘調査されたようで、その実大模型が高麗博物館に展示されていた。横穴式石室で、玄室の両側壁、奥壁には４体ずつ十二支神像が描かれていた。

7．木造橋、ミニチュアカマドセット、切妻大壁造り住居

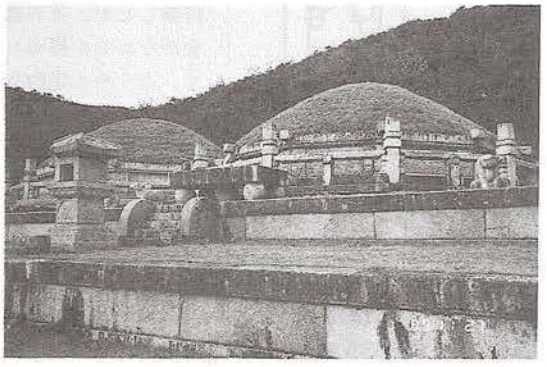
昭和63年（1988）の滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会の発掘調査で、７世紀後半～８世紀の勢多橋の橋脚遺構が検出されたが、それと類似の遺構が新羅の慶州市、月城の南を流れる南川（蚊川）の月精橋遺跡で出土し、文献にあらわれる「蚊川橋」ではないかとされ、７世紀後半代には存在したと考えられてい



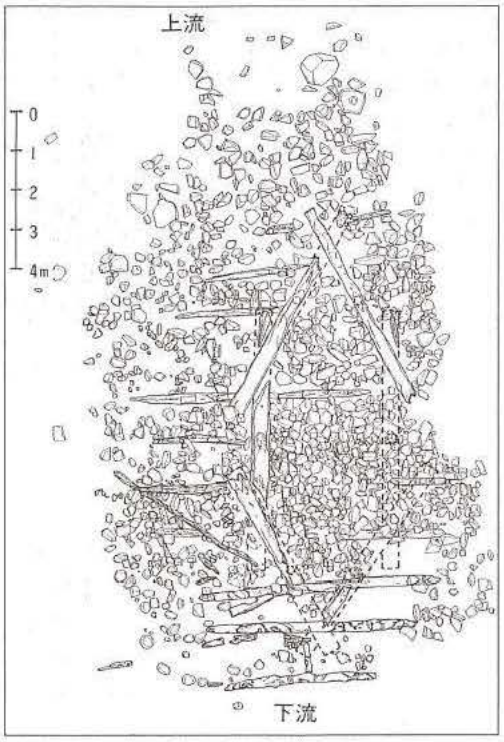
満月台　元徳殿付近から南を望む



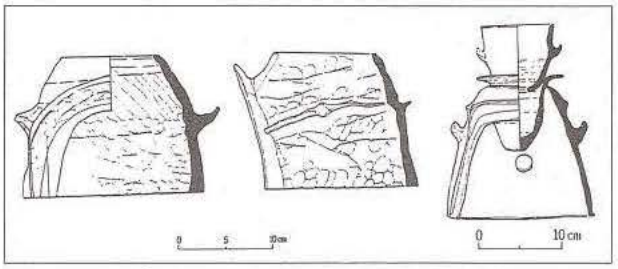
満月台　会慶殿（東北より）



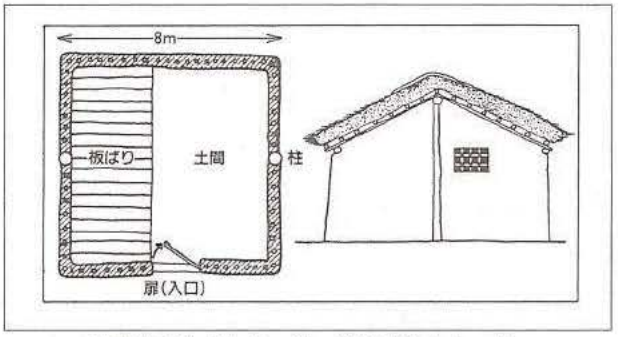
恭愍王陵（左：玄陵、右：正陵）



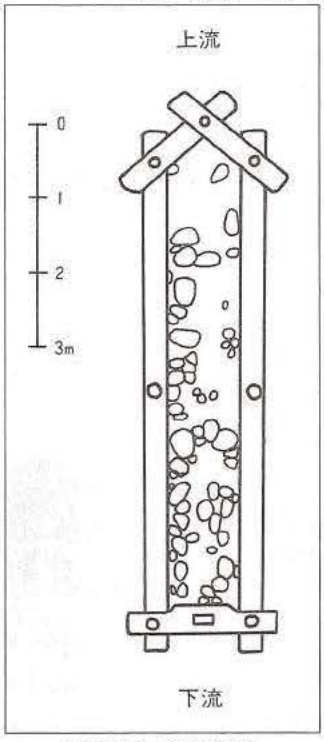
勢多橋橋脚遺構平面図



大津北郊出土のミニチュアカマドセット
（松浦俊和「ミニチュア炊飯具形土器論」『史想』第20号　1984年による）



切妻大壁造り住居　林　博通「渡来人の村」
（『図説滋賀県の歴史』河出書房新社1987年）による



「蚊川橋」橋脚遺構
（『月精橋発掘調査報告書』1988年による）

る。高句麗の地でも大城山城、安鶴宮の真南に当る大同江北岸の青湖洞およびその対岸である休岩洞において、大きな角材を用いた木造橋の基礎骨組の出土が伝えられており、これが具体的にどういう構造のものか勢多橋と比較したかったので、写真と実測図を持参したが、その機会がなかなか得られず、ようやく定陵寺を見学中に朱栄憲先生にお尋ねする機会を得た。先生は勢多橋の資料を見られて、清湖洞の木造橋はこれとは構造が異なること、これとは渤海の上京龍泉府（東京城）の七孔橋が類似することなどを御教示されたが、具体的に七孔橋がどういうものか知ることはできなかった。

また、大津北郊の後期群集墳の横穴式石室から多く出土し、「渡来人の墓」を特徴づけるミニチュアカマドセットの高句麗での出土状況についても図面を示してお聞きしたところ、共和国でも４～５世紀の古墳からたくさん出土するとのことであった。

さらに、大津市穴太遺跡などで検出の多い切妻大壁造り住居の写真と図を提示してその有無についてもお尋ねしたが、これも共和国でも検出されるというお答えであった。

こうした遺構・遺物の具体的内容については今後比較検討していく必要があるが、両者には緊密な関連がある点をあらためて認識することができた。

（林　博通）

参考文献

① 金日成綜合大学編、呂南喆・金洪圭訳『五世紀の高句麗文化』1985年　雄山閣
② 永島暉臣慎「高句麗の都城と建築」（『難波宮址の研究』第７　1981年）
③ 千田剛道「清岩里廃寺と安鶴宮」（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　1982年　同朋舎）
④ 田村晃一「高句麗の寺院址に関する若干の考察」（佐久間重男教授退休記念『中国史・陶磁史論集』1983年）